

## ほんとは、いつぱいほしい

あつしさんは休みじかんになると、クラスの女の子たちの、遊びのじやまをよくしました。

ゴムとびをしていると、前にきてとべなくしたり、オルガンをひいていると、スイッチを消したりしました。注意されると、だれとでもけんかになりました。悪口を言いあったり、たたきあったりするのです。

ある日、あつしさんは「つらいこと」という題で、作文を書きました。

いじめられることがつらいけど、ぼくもいじめるばあいがある。  
これだけは、なかなかおせない。うちではとくにないし、ふう  
ふげんかもない。しあわせな かけてい。

がつこうでは、一日に、二回から五回ぐらい、いじめられる。

つぎの日、その文をもとに、みんなで話し合いました。

あつしさんが、みんなにされていること、みんなが、あつしさんにされていることなどを出し合い、そのわけも考えました。

まさしさんはその中で、自分の気持ちを話してくれました。

「ぼくは、あつしさんを一日に何回もいじめていました。何にもしてないのに、あつしさんを見るとたたいたたり、だれかのじやまをしていると、なぐったりしていました。」

あつしさんは自分のことを、つぎのように書いてきました。

オルガンを消すのは ふざけてしていた。いじくらしいことをするのには、やめようと思う。きょうはやめようと、考えているんだけど、手がふらふらと、出てしまう。やめるのを、せいこうする日もあるけれど。友だちがとくにいないから、ほとんどの日、ぼうつとしている。ほんとは、いっぱいほしい。



# ほんとは、いっぱいほしい (小学校中学年向け)

## A 教材設定の意図

子どもたちは、いろいろな成長のテンポを持ちながらそれぞれに自分の世界を広げ、育ちあっている。一人ひとり違った暮らしの中での育ち、さまざまな「思い」を持ちながら、学校での生活を送っている。この当たり前のことが集団生活の中で忘れられがちになり、お互いを認めにくくしている。そのために子どもたちの中にさまざまな問題が起きてくることがある。

「あの子、へんな子や」とか「変わった子」とかいう見方から始まる「いじめ」や「荒れ」等はまさにその現れといつてよい。学級の中にこのような問題が起きているときにどのような取り組みをしていかなければいけないかを本教材を通して考えてい。

それにはまず、「問題行動」をしている子の思いや生活を知ることから取り組みが始まる。その悩みが深いほどなかなか語ってはくれないが必ず何かわけがある。その子の言いたいことがあるはずである。それを知ることである。そして、その思いを今度は周りの子どもたちといっしょに考えたい。その子の問題を取り上げ考えあつていく中で一人ひとりの子どもたちが、自分を見つめ、友だちを見つめ、暮らしを見つめ、お互い分かりあい、助けあう集団をつくりだしていつてほしい。

## B 教材の解説

本教材は、ある小学校の三年生の学級の取り組みをもとにしてい。この学級では過去二年間の生活の積み重ねの中で四月当初からすでに「注意するーされる」の関係が固定化していた。「あの子はへんなことをする子」というレッテルはりや決めつけや思いこみでの注意がよく聞かれた。そこで日常的には具体的な事実即して話し合ったり書いたりしてきた。そういった一人ひとりの子どもたちが自分のしたことを振り返って考える取り組みを素地にして、さらに『つらいことあるねんな』(参考参照)という教材を使って友だちについて考えた。その授業の中で書かれたのが教材の中のアつしさんの文である。

あつしさん自身、クラスの中で自分をうまく表現できずに周りのいやがることをしてかして「もめごと」をつくりだしていた。だから、彼自身の行動によるところも大であるのだが、現状としてすでにぬきさしならない周りの決めつけができあがっていた。

あつしさんのことを学級の中で話し合っていく中で、周りは「なおしてやろう」と思っていたこと、あつしさんは「なおそう」と思っていたことが分かってきた。それなのにうまく気持ちがあつながつていかなないのはなぜかを考えた。そして、それは「なんにもしてないのに」とか「みるとしてしまおう」というあつしさんに対する決めつけがあつたことに気づいていくのである。決めつけていた側がそのことに対して「いじめていた」という感じ方ができれば、決めつけをされてつらい思いをしてい

た側も「友だちがいらないから」「ほんとはいっぱいほしい」と、より深い気持ち伝えてくれる。レットルをはずしてはじめてお互いが素直に向きあえ、わかりあうことが始まるのだと考える。

本教材はこうした授業の取り組みをもとに構成したものである。

### C 指導上の留意点

① 学級の中で「あつしさん」のような立場の子がいれば、その子の問題を中心にして最初から授業ができればよい。その場合、その子とのつながりを十分深めておく必要があるし、授業で話し合うことについても本人の了解を得ておく必要がある。

② 子どもたちに「つらいこと」を書いてもらう場合は日頃からの教師と子どもたちのつながりが問われてくるので、本音を語ってくれる信頼関係をつくるように努めたい。

③ 子どもたちが書いてくれた「つらいこと」には真摯に応えていかなければならない。そのためには家まで足を運んだり、みんなの問題として考えたり、あるいは、個別に力づけたりしてその内容に応じた取り組みをしてほしい。

### D 参考

・第一回石川県同和教育研究大会報告

「ほんとは、いっぱいほしい」

森 朝子（鶴来町立明光小学校…当時）

・人権教育読本「せいかつ」教材集3（解放教育研究所編）  
「つらいことあるねんな」

本教材を使った授業から

◆あつし君の気持ちも、まさし君の気持ちも、自分に振り返って思うことができたと思う。頭ではわかっているが、「友だちの思いを知り、考え合う」ということまでは、実行することがむずかしいことだと思った。折に触れ、指導する必要がある。「A君がときどきいじめる。わたしは、ほんとうはななかよくなりたいたいのです。」

「友だちがほしくてそんないじわるする人は、少しだけだと思う。」

「ぼくも、あつしくんみたいになったことがあります。友達になりたいからふざけたのですが、ぎやく効果で、友達がへってしまいました。ぼくはもう、そんなことはやめたいと思います。」（羽咋）

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	児童の活動・指導の要領
<p>一 導入</p> <p>①今日は友だちのことや、自分のことを考える勉強をします。</p> <p>二 展開</p> <p>②教材を読みましょう。</p> <p>③あつしさんはどんなことをしていましたか。</p> <p>④あつしさんのようなことをされたら、どんな気持ちになりますか。</p> <p>⑤あつしさんはどんなことを「つらいこと」と書いていますか。</p> <p>⑥まさしさんはあつしさんにどんなことをしていたと話してくれましたか。</p>	<p>①教材（プリント）を配る。</p> <p>②わかりにくい語句を説明する。</p> <p>③みんなの受け入れがたい行動をしていることをおさえ、後半でどうしてそんなことをしたのか振り返るように板書する。</p> <p>④自分の生活の中の経験と照らしながら考えさせたい。</p> <p>⑤自分から人のいやがることをしているあつしさんが「いじめられてつらい」気持ちで毎日いたことに注目させる。</p> <p>⑥注意していたつもりから、あつしさんを見ると「わけもなくたたいたりしていたことをおさえる。そのことがあつしさんには、いじめられること、つらいことであったことに気づかせる。（板書で⑤をふりかえる。）</p>

⑦ あつしさんはどんな気持ちで友だちのじやまをしていたのでしょうか。

⑧ 「ほんとは、いっぱいほしい」という言葉から、あつしさんのどんな気持ちかわかりますか。

### 三 まとめ

⑨ 自分たちのまわりにもあつしさんやまさしさんのような話はなかっただろうか。また、自分もあつしさんのような「つらいこと」はないだろうか、書いてみよう。

⑦ 自分では「やめよう」と思っているけど、ついやってしまっていたことに気づかせる。そして、友だちがとくにいないからぼうっとしていたことも原因であることに気づかせたい。

⑧ 友だちがいなくてさびしかったこと、遊ぶ友だちがいなくてつまらなかったこと、そんな気持ちが「じやま」という行動になっていたことを見つけさせ、共感できるようにしたい。

(板書で③を振り返り、原因がこの気持ちにあつたことを分かったい。)

⑨ 自分たちの生活を振り返り、同じような思いをしている友だちがいなか考える。また、自分にも気になっていることや、つらいことがないかみつめさせたい。